

## 田中光顕関係文書紹介（十三続）（付）杉原夷山宛田中光顕書翰紹介

安岡昭男  
長井純市

（前号からの続き）

さて、夷山宛田中書翰の概要を見てみよう。田中が夷山の経営する中行社を知ったのは同社発足の翌年大正七年一月であった（大正七年四月一日付）。その後、田中が発した書翰の宛名書きには、当初「中行社」とあったが、のちには「夷山」となり、田中も自らを「光顕」と記すようになった。それは両人が信頼と親密の度を深めたことを示している。書翰の内容はすべて書画の購入に関するものである。

田中の書画収集、なかなんぞ志半ばで斃れた幕末勤王家の遺墨収集にかける熱意は並大抵のものではなかった。この点に関して、田中は、「小生は決而買占め候而価の昂騰を待ち売却して利を貪り候心底に無之候。全く殉難烈士之遺墨の余り安価にして、近来糊口の之画工之つく芋が何千円と申事を憤慨しての事に有之候間、結局可然処へ寄附に而も可致と存居申候」（大正八年三月二日付。本稿において、史料の引用に際して漢字は現代のものに改め、仮名は平仮名に統一した。また、適宜句読点を付した）と述べている。つまり、彼の熱意は、私的蓄財のため

はなく、遺墨が殉難志士の歴史を貶めるかのように安価に売買されている現況への嘆きに発しており、購入・収集したのちいずれそれらを相当の機関に寄付するつもりであるというのである。確かに、晩年田中はこれを実行した（恐らく、世間には田中の熱意を勤王家の顕彰に名を借りた財テクであると邪推あるいは批判する向きもあったであろう）。田中は幕末勤王家の顕彰には自負を有しており、「維新前殉難烈士之御贈位は多く小生取計候」（大正七年三月二九日付）と誇らしく述べている。

ちなみに、田中の真贋判定の眼力・眼識は相当なものであった。たとえば、藤本鉄石（備中岡山藩。天誅組の総裁）の遺墨について、「近來の十中の中迄贋作には恐入候」（大正七年二月二八日付）と述べ、また藤森弘庵（播磨小野藩。号、天山・大雅など）作とされる漢詩の字の誤りを指摘し、弟子による偽作であろうと推定している（大正七年八月二三日付）。さらに、大橋訥庵（江戸生まれ）の遺墨について「書」は本物であるものの、「印章」は「印刷」であろうと見抜いている（大正七年三月一四日付）。田中は、晩年、真贋の見極めはただじっと見ること

にあると言っている（田中直樹編『憂国遺言』〈鯉書房、一九三九年〉二六一頁）。

全書翰を通して、一度に支払われた代金の最高額は三五六円（大正七年一月一九日付）である。他は、もっぱら一〇〇円未満であった（支払いは神楽坂にあった川崎銀行の小切手で行われている）。支払金額の妥当性については判断がつかかねるが、田中は妥当な価格で購入するために夷山を介していたようである。田中自身が自ら直接購入に乗り出すと立場上高額で買い取らざるを得ないと夷山にこぼしている（大正七年三月一二日付）。なお、この記述は、死去して間もない高知県画家山岡米華の作品購入を田中が遺族に申し出た場合を想定してのものである。

そのために買い取り希望者が田中であることを秘して夷山に購入を依頼している。

上記の通り、田中の購入品の中心は何よりも幕末勤王家の遺墨であった。「維新前に殉難之士にして書画有之候分所望」（大正七年一月二九日付）、「殉難者又は慷慨家にて気節のある人の書画を好み候」（大正七年二月一七日付）、「実は本年戊午之歳にて六十一年前〔安政の、筆者註、以下同じ〕大獄之事杯想ひ起し候に付当時君国の為に縲綏に罹り候烈士之遺墨蒐集仕度」（大正七年二月一九日付）など、田中自身のことが何よりも明瞭にそれを物語っている。あるとき「筑波山麓の旅館」に藤田小四郎の「尤物」を発見し、「垂涎難禁」く思ったが、旅館の主人から「売らぬ」と言われ「失望」したとも言っている（同上）。

田中は遺墨の表装についても一家言を有し、たとえば「一文字の色白き故、紙中を黒く見するの嫌あり。今後は薄茶か又は薄鼠色に願たし」

（大正七年二月二七日付）などと具体的に要望を伝えた例もある。さらに、和歌にも蘊蓄を有しており、たとえば僧月照の歌を批評して「春の枕詞にかかる衣を用候事珍らしく存候。古来の作例如何哉と存候」（大正七年三月一四日付）などと問い合わせている。夷山が、このような高度な質問に答え得る人物であったことも田中の信頼を得た理由であろう。

田中は、時として思いがけず懐かしい遺墨に遭遇することもあった。大正七年三月三〇日付書翰には、「維新之前々年十二月〔実際には慶応二年一月〕薩長連合之事成りて「木戸孝允」翁か長藩の使として薩摩に赴くの途上、小生が悪詩を賦して翁に示せしに其の韻を次ぎて小生に与へられしもの」と、紹介された遺墨にまつわる生々しい思い出が記されている。これに関して、木戸公伝記編纂所編『松菊木戸公伝』上（マツノ書店復刻、一九九六年、七二六頁）には、確かにこのとき木戸が田中の「韻に和」して「東天風雨悪 西海屢揚波 一軻不避險 逆風入薩摩」という五言絶句を賦したとの記述がある。

この他、夷山宛田中書翰に記された人物を、今仮に便宜上(一)勤王家、(二)学者、(三)画家、(四)書家に分類して書き出せば、下記の通りである。出身地の表記には、下中邦彦編『日本人名大事典』（平凡社、一九七九年）、荒木矩編『大日本書画名家大鑑』（第一書房、一九七五年）を参照した。

勤王家 鮎澤伊太夫（水戸藩）、梅田雲浜（福井藩）、大橋訥庵（江戸）、

菊池教中（江戸）、木戸孝允（長州藩）、日柳燕石（讃岐の佚

客、高杉晋作の支援者。この人物について、田中は高杉の直

話を得ていたという（大正七年二月二六日付）、月照（大坂、

僧侶)、河野鉄兜(播磨)、高杉晋作(長州藩)、武市半平太、田近長陽(豊後)、伴林光平(河内出身、僧侶)、長尾秋水(村上藩)、橋本香坡(沼田藩)、藤井藍田(阿波)、藤田小四郎(水戸藩)、藤田東湖(水戸藩)、藤本鉄石、藤森弘庵、松本奎堂、村山半牧(越後)、山田頌義(長州藩)、頼三樹三郎(京都)、淡海槐堂(近江)

## 学 者

安積良斎(陸奥)、太田錦城(加賀)、乙骨耐軒(幕臣)、加藤桜老(水戸)、草場船山(不明)、草場佩川(佐賀藩)、後藤松陰(美濃)、斎藤拙堂(津藩)、寺門静軒(江戸)、土井馨牙(伊勢)、羽倉簡堂(大坂)、畠山桂花(水戸藩出仕)、東崇一(岩国藩)、広瀬旭荘(豊後)、広瀬淡窓(同上)、藤井竹外(高槻藩)、宮本尚一郎(水戸藩)、森春濤(不明)、梁川星巖(美濃)、山田方谷(備中松山藩)、龍草廬(京都)

## 画 家

雲華上人(不明)、遠藤香村(不明)、大倉雨村(越後)、玉澗(近江)、岳陽(不明、僧侶)、坂部天龍(不明)、佐多椿斎(薩摩)、菅井梅閑(仙台)、鉏雲泉(肥前)、谷口藹山(越後)、谷文晁(江戸)、竹本石亭(旧幕臣)、土佐光清(京都)、十時梅崖(大坂)、富取芳斎(越後)、長町竹石(讃岐)、中村竹洞(尾張)、中山高陽(土佐)、沼田荷舟(尾張)、春木南華(江戸で活躍)、春木南溪(江戸)、日根野対山(和泉)、福田半香(遠江)、藤井直斎(不明)、山岡米華(土佐)、山中静逸(三河)、渡辺小華(華山の子)

## 書 家

大窪詩仏(常陸)、小野湖山(近江)、岡山高蔭(尾張)、高

芙蓉(甲斐)、四宮月洲(不明)、十河飯山(讃岐)、大雅堂(京都)、竹内東仙(陸奥)、趙陶斎(長崎)、矢口謙斎(武蔵)、梁川紅蘭(星巖の妻)

この他、さらに歌人として八田知紀(薩摩藩)、鎌田正夫(江戸)、宗教家として鴻雪爪(御嶽教管長)がそれぞれ登場する。これをもって、文人田中の博識ぶりの一端が窺われるというものである。幕末に尊攘激派の一人であった若者が老年に達したときの姿の一例である。

以上、夷山宛田中書翰の概要を紹介した。

なお、国立国会図書館憲政資料室所蔵「田中光顕関係文書」には、夷山の名を見出すことはできない。それは、『山県有朋関係文書』(尚友俱樂部、全三巻)所収の山県宛田中書翰においても同様である。

さて、夷山宛田中書翰の意義について考えてみよう。これを狭義に捉えるならば、田中の遺墨収集のあり方の一端が明らかになったこと、また田中・山県両人において文人として共通する素養・教養の一端が具体的に明らかになったことに意義を見出せるであろう。これらはこれまで余り注目されていなかったことである。

他方、これを広義に捉えるならば、有力な政治家(国会議員に限定されない)の結合紐帯としての文人的側面、素養・教養の幅の広さと、その重みが明らかになったと思われる。

昨今、さまざまな意味で閣僚や国会議員の素養・教養が云々されるが、辻井喬『叙情と闘争』(中央公論新社、二〇〇九年)は、国家指導者の芸術に関わる「知性」「知識、教養」という観点から、白洲次郎や宮澤

喜一、さらには現代ドイツの政治家を高く評価しつつ、他方、現代日本の政治家全般にそれらが不足していることを具体的なエピソードと共に指摘している。

ちなみに、筆者が勤務する（あるいは勤務した）大学という場所に置き換えて言えば、学士力という造語で表象される実務的且つ広範囲に応用可能な知の体系（教養）を学生に修得させることの重要性が近年声高に叫ばれている。これは、それが現状において存在しないか、あるいは不足しているからであろう。これについては、清成忠男「教養教育の再構築」〔學士會会報〕第八五九号、二〇〇六年七月）を参照されたい。

要するに、政治家の公共空間における理性に関わる結合紐帯が、実は私的空間ともいふべき領域における美学的な感性に関わる結合紐帯と重なり合い（辻井が言うところの知性・知識・教養）を有しており、それらが相俟って国政の指導に有効に機能することを示しているように思われる。そして、今後もしそうした視点に立つ研究上の試みを続けていきたいと考えている。その点で、御厨貴『権力の館』（毎日新聞社、二〇一〇年）は示唆的な成果である。

最後に、杉原氏所蔵の夷山関係史料の中に新たに田中自筆書翰六一通が発見され、二〇一一年一月に南会津博物館においてその閲覧・写真撮影を終えた。これも機会を改めて紹介したい。

【23】 大正7年3月28日

記

一 金八拾六円 竹石

一 金四拾八円 三樹  
一 金参拾四円 半香  
ノ金百六拾八円

右之処へ幸に高知県自金式百円之小切手到来候付差出候間右之内に而御引取被下残余之金参拾式円は当分御手許へ御預かり置被下度候也。

七年三月廿八日

光頭

夷山老台梧下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、七年三月廿八日、東海道岩淵、田中光頭。

【24】 大正7年3月29日

一 香坡七絶

絶妙と存候に付購入仕候。然に同人之歿せし時の年齢何才にてありしか一向に分り不申候。又維新前後殉難烈士之御贈位は多く小生取計候事に有之候処香坡は脱漏之様に存候。甚遺憾且気毒之事に付、寺内首相へ申遣候積に有之候。

奎堂は不得已双幅を買取可申候。然に外の五家は入用に無之候間、時機を見て直段は如何程に而も不苦候。何卒可然御執計被下度御依頼申上候。奎堂は先頃御譲り受いたし秋水之小幘と同様の表装に致度候。又半牧子の小品も同様の表装に致度候間よろしく御心配被下候。但、奎堂の幅の中に巻き込置候。

三口金九拾五円 内三十二円引

残六十三円は跡自差出可申候也。

七年三月廿九日

光頭

夷山老台座下

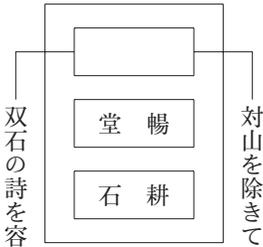
〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、大

正七年三月廿九日、東海道岩淵、田中光頭。

【25】大正7年3月30日

昨日御發送之特報唯今到来。拜見候処木戸松菊翁之書有之。是は維新之前々年十二月薩長連合之事成りて翁が長藩の使として薩摩に赴くの途上小生が悪詩を賦して翁に示せしに其の韻を次ぎて小生に与へられしものに有之。現に当時の書状と、もに所蔵致し居申候間供御一覽申候。御覽了の後御返却賜り度候。

昨日申上置候奎堂之小品は更に一幅となし又竹外書桂花の詩は対山の画桂花の上に貼付して即ち合装一幅となし度候間奎堂のと同様新たに表装御願申上候。又、



如此致候時は一幅は活き申候間、時機を見て御壳却被下度。代価は如

田中光頭関係文書紹介(十三続)

何程にても不苦候。

一 金六拾参円也

一 金四十四円 奎堂外五人の双幅

一 金三十八円 静庵五律

一 金十三円 松陰七絶

合計金九十五円 内三十二円先日の残金を引く。残て本文の通り。

右小切手を以差出候間御受取被下度候。勿々

七年三月三十日

光頭

夷山先生侍史

〔封筒〕なし。

【26】大正7年4月1日

香坡御贈位の事早速御示教被下深謝之至に候。嘉永癸丑歳首の詩殊に妙と存候。謹て感賞の辞を呈し候。流石に名画輻湊の良港。本年一月以来弊船も時々御出入の栄光を得満足此事に御座候。此上とも関税の軽減を哀願仕候。呵々。村山半牧子双幅絶佳直ちに貴命の儘取蔵仕候。石亭の山水は一先返進に及候。勿略不具

大正七年四月初一

青山拜

夷山老台座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大

正七年四月一日、東海道岩淵、田中光頭。

【27】 大正7年4月17日

謹稟 長尾秋水之伝詳細に御取調被下深謝之至候。鬱悵之世を益する  
尠少ならざるを喜び申候。藤井直斎之画幅は先頃一応拝見仕候処、旭  
莊が旭字を脱落せしが面白からず候而返上候事に御座候得共、惜しき  
ものと存申候間、買入度候条御送付被下度候。代価は五円五十銭と有  
之候得共五十文に而も減し候は、猶更難有候。先日之表装最早出来可  
申哉相待居申候。天下之一品かと存申候。勿々

七年四月十七日

古谿叟

夷山老台座右

一 鉄兜 十一円五十銭 一 半牧 四十五円 一 竹外 廿一円  
ノ七十七円五十銭

右、川崎銀行への小切手を以差出申候。実は、疾く差出可申候処御旅  
行の由に付、相扣へ居候間延引仕候也。

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大

正七年四月十七日、東海道岩淵、田中光頭。

【28】 大正7年5月12日

先日は得拜晤不堪深謝候。別紙小切手之阿堵物乍延引差出候条御受領  
被下度候。文晁、淡窓、竹外、槐堂四幅之表装出来正に落手仕候。残  
りの分も早く出来候様御依頼仕候也。

五月十二日

古谿叟

夷山兄侍史

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、七年  
五月十二日、東海道岩淵、田中光頭。

【29】 大正7年6月1日

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿、親展。  
裏、七年六月一日、東海道岩淵、田中光頭。

〔註〕 封筒のみ、書翰本文なし。

【30】 大正7年6月25日

良斎七律を留め置き竹外之二幅は返上仕候。別紙小切手御受取可被下  
候。頓首

六月廿五日

光頭

夷山老台研北

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、七年

六月廿五日、東海道岩淵、田中光頭。

【31】 大正7年6月27日

記  
一 玉潁 墨竹  
一 詩仏 竹石

右二幅留置申候。

一 高陽山人 漁夫之図

右紙中汚穢に付見合せ申候に付返上仕候。

一 予而裝潢御頼仕置候半牧山水小品及松本奎堂小品等之分出来候は、御送付被下度候也。

六月廿七日

夷山老台梧下

光頭

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原夷山先生侍史。

裏、大正七年六月廿七日、東海道岩淵、田中光頭。

【32】 大正7年7月12日

□「破損、判読不能。以下同じ」見。陳者本月三日に川崎小切手を以差出候玉漣と詩仏の代金三十二円の事を忘却□し、聲牙、錦城二幅の代と併て、更に昨十一日差送り申候□付重複致申候間御預かり置□下度候。

春水、天山、雨村之三幅は着之上熟覽可仕候。

奎堂其外台張二幅 瑞山墨梅

右は一応御返却被下度候。再考之上表装御願可仕候。

七月十二日

古谿叟

夷山老台研北

尚々 広足賛芙蓉の畠は一度拝見は仕候得共、変更仕候様に覚え申候。

夫故代価も御払致し無之と存候。尚御取調被下度候。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿、親展。

裏、大正七年七月十二日、東海道岩淵、田中光頭。

【33】 大正7年7月18日

記

一 藤森天山 五絶

一 大倉雨邨 墨竹

一 河野鉄兜 七絶

右、三幅購入致候間代価御申越被下度候。直に差出可申候。尤も先達而之分と御差引被下度候也。

七月十八日

古谿叟

夷山様

再伸 武市瑞山之墨梅御用済に候は、御返却被下度候事。

香村竹 長陽竹

右返上仕候。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大

正七年七月十八日、東海道岩淵、田中光頭。

【34】 大正7年7月22日

訥庵之書幅御送り被下一覽之処近来之尤物に有之大に満足致申候。

一 金五拾貳円 訥庵

一 同四円 不足分

ノ五拾六円

右、小切手を以差出申候間御落手被下度候。

一 瑞山墨梅小幅

右、度々申進候得共御返却無之候。如何之訳に候哉御尋申候。御一答可被下候也。

大正七年七月廿二日

光頭

夷山老台研北

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大

正七年七月廿二日、東海道岩淵、田中光頭。

【35】大正7年8月9日

記

一 金拾四円也

内金八円 天山尺牘

同六円 半牧山水

右二幅代大に延引致申候。小切手に而差出候間御領収被下度候也。

大正七年八月九日

田中光頭

杉原幸様

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大

正七年八月九日、静岡県岩淵、田中光頭。

【36】大正7年8月23日

略陳 六幅之書画正に落手熟覽仕候処、鉄石は真物に相違候得共非常之不出来に有之候間購入之念無之候間返上。

天山之洋々と万梅とは購求可仕候。

月洲は返上。

天山之流水桃花は面白く候得共、動の字之書損が眼に支はり申候。動

〔楷書体〕は動〔草書体〕に有之。勅〔草書体〕にては勅〔楷書体〕

に相成申候。惜しけれとも返上。

莫道人間世は全くの贋作に有之候。是は天山之塾生か小遣錢の足しに

贋作せしものに付先生平生所用の印を盗用したるものと断定致申候。

今日に而も大家の書生には惟と同様の事を為すもの有之候事は万御承

知之事と存候。

小生、伊豆長岡へ旅行申貴答延引に及候也。

八月廿三日

古谿叟

夷山老台座右

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、大

正七年八月廿三日、東海道岩淵、田中光頭。

【37】大正7年9月30日

一金 廿弍円

一 十五円 天山七律

一 七円 静逸梅

右、小切手にて差出候間、御落握之上証書相願候事。

七年九月三十日

田中

中行社

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大正

七年九月三十日、東海道岩淵、田中光頭。

【38】大正8年1月15日

一 昨日出京致申候。別紙小切手差出候間御落手被下度候也。

八年一月十五日

光頭

夷山老兄座下

〔封筒〕なし。

【39】大正8年3月2日

拜見 陳者天山七律及五絶之二幅正に落手一覽申候処、真物に相違無之候。直段も格別不廉に無之候間買求可申候。小生は決而買占め候而価の昂騰を待ち売却して利を貪り候心底に無之候。全く殉難烈士之遺墨の余り安価にして近来糊口の画工之つく芋が何千円と申事を憤慨しての事に有之候間、結局可然処へ寄附に而も可致と存居申候。心事御諒察被下度候。匆々

八年三月二日

古谿叟

夷山老兄座下

尚々 金廿八円 十五円 天山七律

十三円 同五絶

右、川崎神楽坂支店小切手を以差出申候。着候上は御受取書御遣し被下度候。

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、大

正八年三月二日、静岡県蒲原別荘、田中光頭。

【40】大正8年5月6日

弥御安康恭賀之至に候。陳者先日御送付被下候軸物之中月照之梵字一幅は御返し申上候。其他之分は買取候事に致申候に付、月照丈は小包便にて差出申候。御受取被下度候。

一金 三十円 香坡七絶

一同 三十五円 星巖七絶

一同 十三円 天山七絶

一同 九円 香坡小品

一同 八円五十銭 鮎澤短冊

〆金八十七円

右之代金は近日差出可申候間暫時御猶予被下度候也。

八年五月六日

田中光頭

杉原夷山様

〔封筒〕表、麻布森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、青山南町

一の三、田中光顕。

【41】 大正8年6月3日

謹啓 益御健康万賀之至候。陳者天龍道人之碑銘全文一覽致度候に付御手数に候得共叢談中に中略と申処御書認之上御示し被下度御依頼仕候。

菊池澹如之一幅為御見被下度候也。

八年六月三日

光顕

夷山老契研北

〔封筒〕 表、東京市麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、

大正八年六月三日、東海道岩淵、田中光顕。

〔註〕 同封の「征清戦死者招魂碑」

明治中興天地一新三十年間威武大張徳化隆盛四海之内鼓舞

向風莫不奮恩報效二十七年因朝鮮事情清国背盟約天子詔曰

国家将有事於清国各執爾事毋敢或怠於是六軍之衆義動於色

瀝淚誓死天下翕然起而赴事秋八月旭旗煌々鱗鱗掩海往伐清

越九月命大将山県有朋視師其十三日進大旆於安芸広島島以督

之伐之於成歛敗之於牙山攘之於平壤殲之於黄海至十月命大

将大山巖更帥師直指遼東攻金州拔旅順搏威海取牛莊百戰氣

愈振踏果致毅有進無退旗致所向莫不齋粉清国撰服割地乞和

六軍凱旋国威震宇内矣天子嘉尚賞功弔死静岡県人吉山大宗

感将士義勇克济天子之事憫其戰死者而不已与同志人謀欲建

石表名春秋祭祀以慰英魂来請予文予深韻報效之誠也書其事以将大之明治二十九年三月枢密顧問官陸軍中将正三位勲一等子爵鳥尾小弥太撰

【42】 大正8年8月9日

〔封筒〕 表、東京市麻布区森元町一の九、中行社、杉原夷山様。裏、

大正八年八月九日、東海道岩淵、田中光顕。

〔註〕 封筒のみ、書翰本文なし。

【43】 大正8年9月2日

前略 香坡石壁之図初而見受候山水画に有之候。多分自画賛とは存候

へとも山高の印 山高  
水長 が他の自画中に押捺しあらば無論と存候。小生

所有中に竹石の画有之候。此の外は書幅のみに有之候。

竹石画の遊印 詩情  
夜半  
梅花月 と有之候。併し、題詩丈に而もよろしく候間買

収之事に仕候。尚、今後御注意置被下度候。大正三年岡山にて相催候

明治記念会に出品之香坡山水図は全く筆致相違いたし居申候。

鉄石大幅臨峰之分表装何卒お急がせ被下度候。外に数十幅表装之分有

之、追而御依頼可申上候也。

九月初二

夷山様

顕

尚々  
山高  
水長  
之游印の肉色と題詩に捺する所の肉色と大に異なり考もの  
也。

〔封筒〕表、東京市麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、  
大正八年九月二日、東海道岩淵、田中光顕。

【44】大正9年7月9日

秋水 墨竹 一幅

茶郵 七絶 一幅

介堂 蓮 一幅

飯山 詩 小点

藍田 詩 小点

ノ購入仕候。

右、代金(百十三円)之受取書御遣し被下度直に差出可申候也。

九年七月九日

夷山様楮下

尚々 茶村の略伝御示教御願申上候也。

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、七月  
九日、駿州岩淵、田中光顕。

【45】大正9年12月6日

華帖拝見。益御壯健珍重之至候。陳者此度為御見被下候軸物三点四幅

悉皆買求度候。然に先年差出置候  
三樹 一幅 半牧 三幅  
外に、

鏡水小品 ノ八十六円

右之代りに少しに而も御繰合せ被下度、是迄一錢も直切り候事も滞り  
候事も無之候。小生としては十分義務を尽し候積に候。御察被下度候。  
若し御都合悪しく候は、無御用捨御申越被下度候。為其勿々不具

大正九年十二月六日

夷山様

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大正  
九年十二月六日、静岡県岩淵、田中光顕。

【46】大正9年12月10日

九日付御書面拝見。逐一敬承仕候。小生は少しも老兄を疑不申至極御  
困難の状拝察仕候間、此度五拾円御返却にて一切精算可仕鏡水其他共  
悉皆片付候事に致候間御安心被下度候。

一金参十六円也 神楽坂川崎銀行小切手

右、差出候間御受取被下度候。今後殉難者遺墨に而尤物も候は、為御  
見被下度候也。

九年十二月十日

夷山老兄座下

田中光顕

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、杉原幸殿、親展。裏、大正

九年十二月十日、静岡県岩淵、田中光頭。

【47】大正9年12月23日

前略

羽倉簡堂 七律 出戌鼓聲遙

小野湖山 咏史三吉 燈然白樹

右二幅御有合に候は、為御見被下度候。外に御手許に有之候小品類殉難志士にあらざるも普通文人墨客にて詩なり、画なり、歌なり、俳句なり為御見被下度候。屏風の貼り交せに致度候。年内余日無之御多忙御察申上候。とかく来年寛々可得御意候。今日迄の分は都而勘定差引なしにして奇麗に決算之事。

九年十二月廿三夜

光頭

中行社様

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸様侍曹。裏、

大正九年十二月廿三夜、東海道岩淵、田中光頭。

【48】大正9年12月28日

拜見仕候。長町竹石之山水幅は去る七年二、三月の頃貴社自八拾六円に而購入の品有之、此度之分自も一層出来よろしく大雅堂の如きものに而今以珍藏致居申候間此度の分は返上仕候。

小品類中には山田空齋、鴻雪爪、八田知紀、鎌田正夫等の如きは小生

知人に而詩歌の応酬致候事も有之。小品は随分所持致居申候得共、所謂御蔵払之事故悉皆纏めて御譲り受致可申候に付一大御奮発被下度直切り候事は此度始而に有之候。

此後小品御入手に候は、必為御見被下度再度とは直切不申候。草々頓首

九年十二月廿八日夜

光頭

夷山様

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸様侍曹。裏、大正九年十二月廿八日、東海道岩淵、田中光頭。

【49】大正9年12月30日

昨日呈一書置候通竹石の一幅御返上仕候。小品の分は定而一割位は御引き被下候事も相叶可申哉と存候間、仮に金四拾五円小切手差出申候。不足の分は来年差出可申候。定而年内御入用の事と存候故如此御座候。

頓首

九の十二トウ三十日

光頭

夷山老兄几下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大正九年十二月三十日、田中光頭。

【50】 大正10年1月19日

拜啓 陳者小品書画代金六拾四円五拾銭本日川崎銀行檜物町本店小切手差出候間御受領之上御一報被下度候。今日自蒲原別荘へ避寒之為め罷越候勤王家物に而珍品御手に入り候は、為御見被下度候也。

大正十年一月十九日

光頭

夷山老台座下

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大

正十年一月十九日、田中光頭。

【51】 大正10年4月3日

一 藤井藍田 六首 一軸

一 東澤瀉〔瀉〕 梅菊 一幅

一 広瀬一家 尺牘 一卷

右返上仕候。藍田と澤瀉〔瀉〕とは御世話を以購入之分有之候に付最早入用に無之候故也。小品類未着也。着次第何分の決定可申上候也。

四月三日

顕拜

夷山様座右

〔封筒〕 表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、十年

四月三日、東海道岩淵、田中光頭。

【52】 大正10年4月14日

一 小品 二包代

金四拾六円也

右、神楽坂川崎銀行支店小切手を以差出候間落手之上御一報被下度候也。

大正十年四月十四日

田中光頭

杉原幸様

〔封筒〕 表、東京麻布森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大正

十年四月十四日、駿州岩淵、田中光頭。

【53】 大正10年4月17日

書籍代の事は、

星巖遺稿 山中人饒舌

右二書品切れにて十日程後に京都より着に付、其節御発送被下候段御申越に相成居候故、一纏めにして差出可申と存じ延引致候。夫れは夫れにして御入用と存候間本日例の川崎小切手にて差出申候。御受取の上御一報被下度候也。

十年四月十七日

田中

杉原様

〔封筒〕 表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸殿。裏、大

正十年四月十七日、東海道岩淵、田中光頭。

【54】大正10年3月28日

一金四拾九円也

内金廿貳円 岳陽山水

同廿七円 蘭疇「松本良順、順」山水

右、小切手を以差出候間御受取被下度候。

一 星巖遺稿 四冊

一 顛天集 一冊

一 環碧樓遺稿 一冊

一 東仙詩抄

一 墨竹指南

一 遠思樓詩抄

一 梅墩詩抄

竹田

一 山中人饒舌

小華

一 四君子画帖

荷舟

一 聚鳥画譜

一 可庵画叢

一 書画別号集覽

一 同統編

一 日本画人名辞書

一 同統編

一 竹洞四君子

右之書籍御送付被下度候。代価は精々御勉強之上に相願候也。

十年三月廿八日

光顕

夷山様

〔封筒〕表、東京麻布森元町一の九、杉原幸殿、親展。裏、大正十

年三月廿八日、東海道岩淵、田中光顕。

【55】大正11年4月4日

一 別紙小切手差出候間御受領被下度候也。

十一年四月四日

光顕

夷山老台座下

〔封筒〕表、東京市麻布区森元町、杉原幸殿、親展。裏、大正十

年四月四日、静岡県岩淵、田中光顕。

【56】大正11年4月27日

新樹啼鶉之好時節御壯健奉賀候。陳者昨十年の書画叢談の十二月分

は御発刊に不相成候哉。御一報被下度候。一ヶ年分を製本に頼申度候

処、見当り不申候に付御尋申上候。為其匆略不具

十一年四月廿七日

田中光顕

夷山老堂座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町、中行社、杉原幸殿。裏、大正十一年四月廿七日、駿府岩淵、田中光顕。

【57】大正11年6月24日

梅天之候益御清穆大賀之至に奉存候。陳者書画叢談不相交御発刊敬服仕候。近頃之財界には御苦心之程御察申上候。

山県公之詩歌之幅は代価如何程に候哉御示教被下度候。写真に而はどふも真偽確と判明難致候に付実物一覽相叶候は、好都合に候。先日名古屋に而岡山高陰之売立有之中に山県公数十幅有之候。之か為に代価に影響を及ぼし候事と存候。如何。

右得貴意度候。草々頓首

十一年六月廿四日

光顕

夷山老兄座下

〔封筒〕表、東京麻布区森元町一の九、中行社、杉原幸様。裏、大正十一年六月廿四日、静岡県岩淵、田中光顕。

【58】大正12年1月28日

拜呈 寒威難堪候処筆硯益御清福大賀之至に不堪候。陳者先年御譲り受申候小品之中に矢口謙齋と御記載之詩箋有之候。然に印文に

吉字  
○汝

之印有之。どふも矢口とは不被存候。矢口謙齋の名は、洪と申候筈に

候。他に謙齋と申人有之候事歟と存候。乍御手数御取調見被下度御願申上候。

依田焜 岡田鷗里 田口江邨 千坂千里 石川艇齋 野口松陽  
右の六人第九版の大日本人名辞書に相見不申候。略伝何卒御垂示被下度伏而御願申上候。

近来は勤王志士之遺墨御手に入不申候哉如何。

右御願迄。匆々頓首拜具

十二年一月廿八日

光顕

夷山大兄座下

〔封筒〕表、東京麻布区山元町<sup>〔マ〕</sup>、中行社、杉原幸殿。裏、大正十二年一月廿八日、東海道岩淵、田中光顕。

【59】大正12年11月25日

前略

極内密に出京致し青山北町六丁目四十七の一号田中遜方に止宿致居申候間若し御序も候は、御立寄被下度候。勤王物も候は、為御見被下度候也。

十二年十一月廿五日

光顕

夷山老兄座下

尚々 明後廿七日午前ならば都合宜敷候也。

〔封筒〕表、麻布区森元町三の十二「九か」と訂正あり、書画叢

談雜誌社、杉原幸殿。裏、大正十二年十一月廿五日、青山

北町六丁目四七の一号、田中光顕。